

アンデレ便り

主教 アンデレ 中村 豊

変身・Transformation

「枯れ枝の巢に身を隠していた。その木は人気の無い広大な平原の真ん中にぽつんと一本立っていた。ある日竜巻が起こると、その木が根こぎにされ、衰れにも小鳥は住み家を求めて百キロ以上旅をするはめになった。・・・ついに小鳥は、果実でたわわになった木々でいっぱい森へとたどり着いたのであった。」(沈黙の泉より)

予断と偏見

9月22日に行われました神戸教区宣教140年記念式典には予想以上の人たちが参加してくださり、感謝しております。この日、教区内各教会の過去5年にわたる宣教活動の評価及び将来に向けてのアクションプラン報告がありました。これは間もなく冊子となって配布されますが、神のおとずれ6月号で私は次の様に述べました。「神戸教区宣教140年は小さな節目でしかなく、次の10年に向けての第一歩を踏み出す準備とするのが今年なのです。そこで神戸教区に求められているのが、宣教に向けて挑戦する姿勢の再確認です。教会に横たわる様々な問題を放置し、毎年毎年、同じ行事、同じかたちの礼拝の繰り返しは教会をますます弱体化させてしまう原因となります。・・・もしも、準備不足により、アクションプラン自身に具体的な設定と実行が不明確というのであれば、それは単なる作文であり、実行が伴わず、教会を変えようという意欲が最初から欠けている証拠と言わざるを得ません。全力を尽くした上での失敗は、更なる成長へと教会を導きますが、失敗する前に行動を取りやめてしまうのは、教会の弱さの現れであり、今一度、アクションプラン実施の為の仕切り直しが求められます。

「沈黙の泉」では、もし竜巻が起こらず、枯れ木が倒されなかったならば、小鳥はその場所に執着し、枯れ木と共に一生を終え、全ては無に帰してしまうことを警告します。枯れ木にしがみつくのを諦める代償として、今まで経験したことがない長旅の苦しみを味わうことになったのですが、その結果、想像もしなかった豊かな場所を獲得しました。教会の成長を望むことができない枯れ木とは、予断と偏見に根ざした前例主義、伝統主義、現状維持を意味します。そのようなしがらみを振り切って、豊かな場所目指して困難な道を進もうとする決意が今、求められるのです。

人に仕える使命

ユダヤ教の指導者ニコデモが夜、イエスに会いに来たとき、「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることができない(ヨハネ 3:3)」とおっしゃいました。新たに生まれる

とは変身のことです。特に牧師である司祭があらゆる意味で変わらなければならないのです。「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。(コリント1 9:19 以下)」これは聖パウロの言葉ですが、相手の立場にたつ姿勢で福音を宣べ伝えることは、より多くの信徒を獲得するための戦略の一つではありません。聖パウロはイエスの姿そのものから学んだのです。神がイエス・キリストにおいて人間の立場にまで降られ、「言が肉となってわたしたちの間に宿られた(ヨハネ 1:14)」からなのです。僕としての神の受肉は、人間がゴキブリのなかに入って連帯するようなものです。

私の技量や能力、熱意などを前面に押し出して、相手がそれで納得することを求めることが宣教を阻害する最大の原因だということがわかります。聖職の場合、召命をより確かなものとする、宗教改革以来連綿と続いた聖公会信仰と聖書理解や、礼拝に必要な事柄を書物や専門家から謙虚に学ぶことが重要であるとの認識が次第に薄れ、今までに培ってきた不確かな知識や見聞に基づくスタイルが通用すると錯覚してしまうことなのです。ボンフェッファーが言うところの安価な恵みのバーゲンセールに牧師が加担するのです。「安価な恵みは、服従のない恵みであり、十字架のない恵みであり、生きた・人となり給うたイエス・キリスト不在の恵み(キリストに従う 15 頁)」なのです。

聖パウロが強調する自由とは、キリストに従う自由であり、そこには、「心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるか(ロマ 12:2ff)」をわきまえることなのです。

諸行無常の響きあり

NHK朝のドラマ「べっぴんさん」では、神戸聖ミカエル教会の鐘が神戸の街に「カーン、カーン」と響き渡ります。一方、寅さんシリーズのどの映画でも、柴又帝釈天の鐘が夕方鳴ります。様々なトラブルが生じ、最後は失意の内に柴又の家を後にする寅さんの人生は、何事も思い通りにはならないという人間世界の無常を現すと共に、永遠を希求する西方浄土に目を向けるよう、私たちに促しているのでしょうか。大阪・夕陽丘にある四天王寺の鳥居から西に目を向けますと、かつては、須磨の旗振山を見ることができたそうです。寺を訪れる多くの人たちがこの鳥居から夕日を眺めながら、浄土への信仰を確かなものにしたことでしょう。この鳥居は極楽浄土の東門の中心とみなされているのです。

一方、キリスト教の教会は昔から東をすべての物の根源とみなしてきました。ヨーロッパの大聖堂の祭壇は殆ど東に向いておりますが、太陽は、歴史の終わりである日の出によって主の終末が実現されるからです。従って、東に向けて献げる礼拝は新しい天と新しい地を目指す未来に向けての行進となります。仏教徒にしる、キリスト教徒にしる、この世と格闘しながら、来世を希求するに心を抱いているのです。(近畿宗教連盟総会挨拶)